

令和 6 年 5 月 22 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K13135

研究課題名（和文）中期古墳における埋葬施設構造の多様性と規範性の推移とその歴史背景

研究課題名（英文）The Transition and Historical Background of the Diversity and Normativity in Burial Facility Structures during the Middle Kofun Period.

研究代表者

上田 直弥（Ueda, Naoya）

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・助教

研究者番号：70823780

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では近畿各地域における古墳埋葬施設の構造検討を主な手段として、特に古墳時代中期における葬制変遷過程の比較分析を実施した。その結果、前期においてみられた地域の葬制の伝統が中期に入ると全面的に刷新され地域的伝統が断絶すること、一方でそこに至るまでの期間やプロセスには地域により差があることを明らかにできた。また中期に解体された地域秩序が後期の横穴式石室導入に際して復調するものの、階層的な浸透状況や畿内型石室としての画一化の進行などで、前期とは異なるダイナミズムを見せることも推測できた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの古墳時代葬制の研究では、古墳出現期を中心とした古墳時代前期、横穴式石室の導入以後にあたる古墳時代後期が主な対象となってきた一方、墳丘規模が最大化し、様々な面で古墳時代の中でも特徴的な状況を見せる中期の葬制については、その実態が明らかにされてこなかった。今回の研究では中期における近畿各地における葬制秩序の実態を、特に前期との比較という視点から考察し、継続性の解体と秩序の再構築的刷新という時代的特性を明らかにした点に意義がある。

研究成果の概要（英文）：In this project, I conducted a comparative analysis of the changes in burial practices during the Middle Kofun period, primarily through the examination of burial facilities of Kofun in the Kinki region. As a result, I was able to elucidate that the regional characteristics observed in the early Kofun period were completely overhauled during the middle Kofun period, leading to the discontinuation of regional traditions, with variations in the duration and process leading to this outcome depending on the region. Furthermore, the regional order dismantled during the middle Kofun period appears to be reinstated during the late Kofun period, introduction of the Kinai-style horizontal stone chamber. However, it is speculated that there are different dynamics from the early Kofun period, such as the dissemination status to various hierarchies and the progress of standardization as Kinai-style stone chambers.

研究分野：考古学

キーワード：日本考古学 古墳時代 埋葬施設 地域性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

筆者はこれまで小地域単位における埋葬施設構造の検討を手段として前期古墳葬制の分析を実施してきた。ただしその際には竪穴式石室や粘土槨など埋葬施設の種類ごとでの検討が主となっており、地域の中で複数の種類の埋葬施設が併存する背景などに関しては、十分に検討が深められていなかった。古墳時代前期後半に葬制が多様化する背景にいかなる要因が存在するのかを考察することは、墳丘規模が最大化する古墳時代中期に向けてどのような葬制の変化が伴うのかを明らかにするうえで不可欠の基礎作業である。また変化期のみならず中期それ自体における葬制についても、これまでの研究では最上位層での長持形石棺の採用や初現的横穴式石室の存在など目立つ資料が個別的に扱われる傾向が強く、前期的秩序の形骸化以上の意味を与えられていない状況であった。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえ本研究では、中期的秩序の実態を埋葬施設構造の点から明らかにすることを主な目的として設定した。古墳時代中期の特色としては、墳丘規模や埴輪生産規模の拡大など、墳丘外表構造に関する変化が取り上げられることが多いが、一方でこれまで総体的には扱われてこなかった中期古墳の葬制秩序、その成立プロセスを復元的に考察することは、単純な形骸化のみとは言い難い前期からの変化を正しく意義付ける上でも必須の作業であり、この作業を通じて当該時期の葬制秩序に関する政権中枢の管理戦略を明らかにできると考えた。また本研究における検討は、古墳時代後期に畿内型横穴式石室が急速に普及するその前提状況を明らかにする上でも有用であると考えられる。

3. 研究の方法

百舌鳥・古市古墳群をはじめとした中期の上位階層古墳では、前期や後期と比較しても埋葬施設に関する情報が特に限られている状況である。そのため地域を区切ったケーススタディの蓄積、前期から中期にかけて時間軸に沿った変化過程の検討、各小地域の比較検討による全体秩序の復元的検討、という大きく3つの作業を主な手段として研究を実施した。合わせて中期の葬制秩序を相対化するためには同じ地域規模による後期葬制との比較分析が必要になると考え、予察的ではあるが横穴式石室の展開時期を含めた通時的検討も実施した。

4. 研究成果

(1) 畿内各地におけるケーススタディ

猪名川流域 筆者がフィールドワーク等でも長く携わっている猪名川流域では、猪名川の右岸、左岸両方において複数の前期古墳がみられ、全てではないが比較的多くその埋葬施設構造についての情報が得られている。右岸の長尾山丘陵とそこから南下した伊丹台地の西端近くに位置する安倉高塚古墳では共に竪穴式石室が確認されているが、安倉高塚古墳はその詳細構造の検討の結果、直近の周辺地域(長尾山丘陵や左岸の五月山丘陵)ではなくより東、三島地域の弁天山古墳群と関係を持つ可能性が考えられた。表六甲を含めた摂津地域は東西に広く埋葬施設に関わる情報が共有されており、当例もそうした傾向に合致するが、一方で摂津に多い構造(墓壇底が平坦で棺床粘土が直接接するもの)とは異なっており、情報共有ネットワークの多重性を考慮する必要がある。また出土埴輪などから長尾山古墳における大型粘土槨から万籟山古墳の竪穴式石室へと葬制が変遷することが推定できるようになってきており(福永・上田編 2022)、新規種類の葬制が必ずしも地域内で相対的な新相を示すとは限らない点に注意が必要である。

北河内 北河内地域は埋葬施設の種類が判明していても、その詳細な構造は様々な制限から不明である事例が多い。しかし近年は副葬品を中心に再検討が進められていることや(繰納 2021、岩本 2020)、東に低い丘陵を挟んで広がる木津川左岸地域、淀川を挟んで向かい合う三島地域など活発に前期古墳が展開する地域に隣接するため、当該地域を対象とした基礎的検討が不可欠な状況にあった。検討の結果、当該地域の古墳時代前期後半における埋葬施設転換の画期や隣接地域との連動状況、地域内での多元的なあり方などを復元することができた。同じ粘土槨を採用する前期後半の首長墳(藤田山古墳、妙見山古墳等)でもその構造の詳細からは相互の情報共有を認められず、埋葬施設種類の共通性

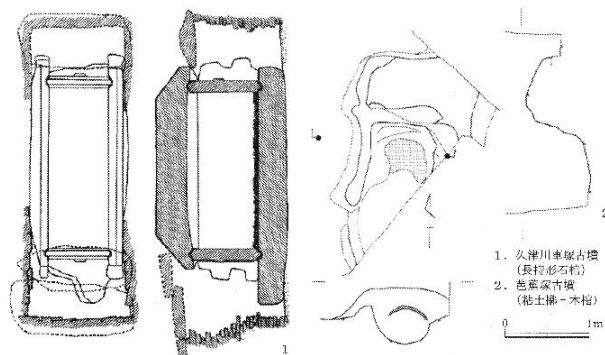


図1 久津川における大型古墳の埋葬施設

以上にその多様性が当地域の葬制秩序の特徴であると考えられた。

南山城 南山城の木津川下流域には古墳時代前期末から中期にかけての首長墳が高密度に分布しており（左岸：綴喜古墳群・男山古墳群等、右岸：西山古墳群・久津川古墳群等）かつ近年には過去出土資料の再整理も進行していることから（下垣 2021、桐井 2022）本研究の課題である中期的葬制秩序への移行過程を詳細にトレースできる場として重要である。本地域では右岸と左岸で異なる動向が認められ、特に右岸では竪穴式石室の導入が極めて鈍くその早い段階から新規の葬制である粘土槨が多く採用されている（西山古墳群など）。また中期に入り久津川車塚古墳、芭蕉塚古墳と盟主的前方後円墳が築かれるが、その埋葬施設構造には連続性が見出せず、前期も含めた地域の特徴として捉えられた。

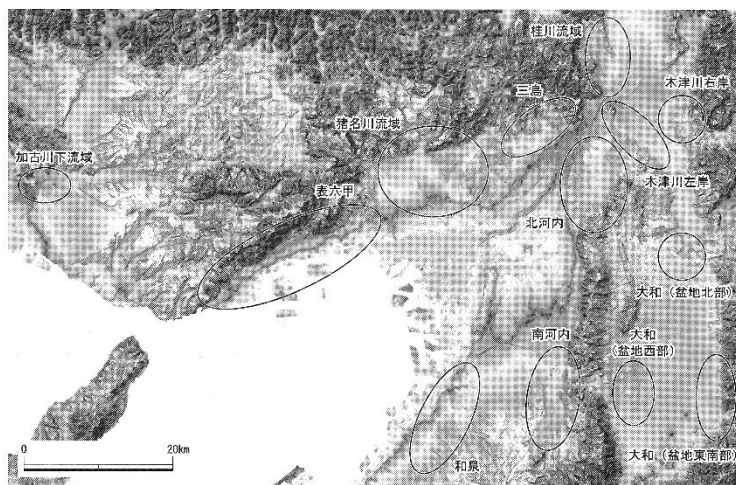
加古川流域 加古川下流域地域は東播磨の中でも特に前期古墳の系列的展開が顕著な地域である。日岡山古墳群と同西条古墳群は地理的に近接しつつ盛行時期を違えて展開する古墳群であり、その関係性は度々議論の的となってきた（高野 1995、福永 2005、藤原 2012）。今回の検討により、埋葬施設の詳細構造における特徴から相互関係について連続性よりもむしろ断絶性を重視できること、地域全体に点在する首長墳に見られるような、石材産出地という地域的特性に影響された在地墓制と、外的影響を受けて成立した墓制とが重層的な展開をみせる状況などを明らかにできた。好条件が重なるため特に階層的状況も複合して分析の俎上にあげられたことが特筆できる。

（2）前期から中期における葬制秩序展開の地域間比較検討

上記地域を含めた畿内および周辺の複数地域を対象に、葬制変化パターンの比較分析を実施した。具体的には近畿の各地域において、前期から中期にかけて営まれる首長墳を対象に、その埋葬施設の構造詳細について継続した地域性が認められるのか、あるいは刷新性が顕著となるのかに着目し、その継承性の有無および地域偏差の問題に取り組んだ。対象とした地域は 大和（盆地東南部、同北部、同西部）、山城（桂川流域、木津川左岸、同右岸）、河内・和泉（南河内、和泉）、摂津（三島、猪名川流域、表六甲）、東播磨（加古川下流域）である。

検討の結果、中期になり継承状況における大きな画期が存在するとともに、先立って前期段階でも一部地域においては、新しい秩序への動きが見られ始め、こうした遺構資料の状況にはその背景として政権中枢部による戦略的な葬制秩序のコントロールが存在したとの見通しを得た。古墳時代前期には有力な首長墓系列が複数認められ、その中では竪穴式石室の構造細部などで継承される要素がみられる一方、中期にはそうした現象が基本的に認められなくなる。

他方百舌鳥・古市古墳群をはじめとした最大級の古墳群では、新しく定型化した長持形石棺の独占的採用が継続的に見られるため、こうした二重状況の創出と維持こそが古墳時代中期における葬制秩序の特徴であると推定した。前期と中期はこれまで、用いられる葬具種類の差はあるが、おおむね同じ竪穴系埋葬の流れとして連続性が想定されてきた。しかし今回の分析の結果、その展開の背景における原理について指向性の差が存在することを指摘できた点は、成果の一つとして重要である。



	加古川下流域	表六甲	猪名川流域	三島	北河内	桂川流域	木津川左岸	木津川右岸	和泉	南河内	大和
前期(前半)	白岡山古墳群	西条古墳群	井天山古墳群	森古墳群ほか	南白丘陵古墳群	凡例	西山古墳群	須賀古墳群	須賀古墳群	平手山古墳群	谷地東南部
前期(後半)		金下山・二本松ほか	長尾山丘陵ほか	崇立山古墳	熱野塚古墳	長法寺前原古墳	西山古墳群	西山古墳群	久津川古墳群		谷地西部
中期	西条古墳群		藤塚古墳群	那家塚古墳	藤田山古墳ほか	長法寺前原古墳	西山古墳群	久津川古墳群	久津川古墳群	古市古墳群	谷地東南部

図2 畿内および周辺地域における埋葬施設の採用状況

(3) 長期スパンで見た葬制秩序展開の予察

竪穴系埋葬施設にもとづく古墳時代中期までの通時的分析と突き合わせるために、古墳時代後期における畿内を中心とした葬制の地域性の問題に取り組んだ。当該時期の首長墳では基本的に畿内型の横穴式石室を採用するが、その個性よりも強い共通性を取り上げられることが多い。実際、平面プランなど地域性が表れやすいとされる属性がある一方(太田 2011) 玄門部の構造など畿内で広く共通した変化がみられる属性もある。前期にみられた地域性の意義をあとづけるためにも、畿内の首長墳クラスにおける横穴式石室の地域性の問題に改めて取り組む必要が考えられた。

首長墳への横穴式石室導入に際しては特に淀川流域左岸の地域と奈良盆地内の各地(巨勢谷の首長墳等)とが大きな役割を果たす。その展開の特徴を見ると、同じエリアで継時的に横穴式石室を採用する首長墓の系列に対して、前後に同格墳を伴わず単発的に横穴式石室を導入する首長墳が時期を限って認められ、特に淀川流域地域でそれが顕著である。これらは平面プランにおける共通性の点でも、同時期の奈良盆地の事例などと比べて相互関連の強い資料群であるといえる。こうした広範な現象は古墳時代全体で見た場合、前期の竪穴式石室における表六甲～三島で見られた現象とともに、地域の特性を反映した現象である可能性もあるだろう。

ただし、これまで筆者が進めてきた竪穴系埋葬施設の検討と対応させるためには、畿内における、特に首長墳を中心とした横穴式石室の小地域ごとのありかたを、よりミクロかつ詳細に分析する必要があると判断した。そこで上記資料のうち、これまで扱われてこなかった玄室側壁における使用石材サイズの定量的比較検討を試みた。今回の研究期間ではその分析方法自体の検討までにとどまっており、実際の個別分析は今後の課題である。

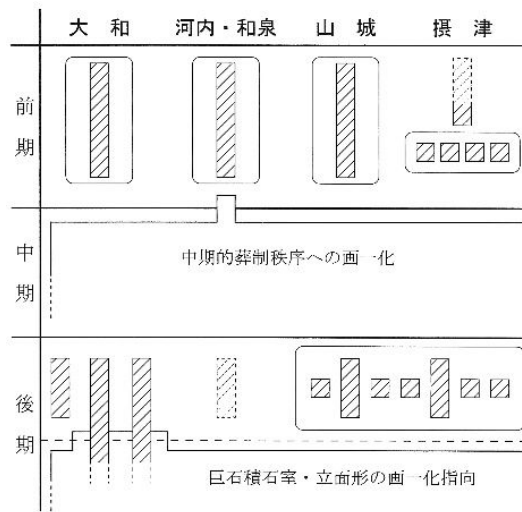
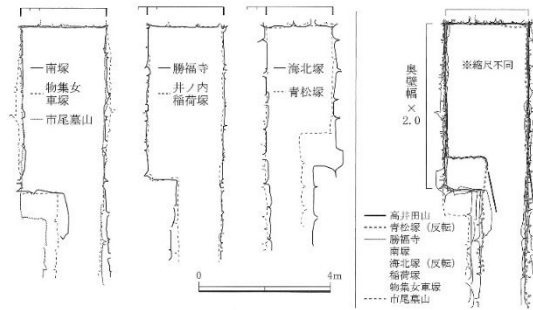


図2 淀川流域における横穴式石室の共通性とその広域展開状況

主要参考文献

岩本崇 2020 『三角縁神獣鏡と古墳時代の社会』六一書房
 太田宏明 2011 『畿内政権と横穴式石室』学生社
 桐井理揮 2022 「西車塚古墳出土埴輪の再整理と編年の位置づけ」『綴喜古墳群調査報告書』京都府教育委員会
 下垣仁志 2021 「男山古墳群の動向」『椿井大塚山古墳と久津川古墳群 南山城の古墳時代とヤマト王権』季刊考古学別冊 34 雄山閣
 繰納民之 2021 「副葬品からみた交野地域の古墳 妙見山・藤田山古墳を中心に」『交野市の金属製品』交野市の文化財 交野市教育委員会
 高野政昭 1995 「加古川下流域における首長墓の変遷」『西谷眞治先生古稀記念論文集』西谷眞治先生の古稀をお祝いする会
 福永伸哉 2005 『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
 福永伸哉・上田直弥(編) 2022 『畿内の地域間関係の解明に基づくヤマト政権成立史の新理解』大阪大学大学院人文学研究科
 藤原光平 2012 「加古川流域における古墳の動向」『加古川市西条古墳群 尼塚古墳』尼塚古墳発掘調査団・加古川市教育委員会

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 上田直弥	4. 巻 767号
2. 論文標題 古墳時代竪穴系埋葬施設の諸問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田直弥	4. 巻 160号
2. 論文標題 横穴式石室からみた古墳時代の首長 近畿	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 18-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田直弥	4. 巻 季刊考古学 別冊39
2. 論文標題 三島における葬制の展開と長持形石棺	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 淀川流域の古墳時代 太田茶臼山古墳と今城塚古墳をめぐって	6. 最初と最後の頁 68-77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田直弥	4. 巻 第32集
2. 論文標題 竪穴式石室における隅部処理様相の基礎的検討	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代吉備	6. 最初と最後の頁 26-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上田直弥	4. 巻 6
2. 論文標題 待兼山1号墳出土腕輪形石製品と待兼山周辺の前期古墳	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪大学埋蔵文化財調査室年報	6. 最初と最後の頁 28-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福永伸哉・上田直弥	4. 巻 第31号
2. 論文標題 宝塚市安倉高塚古墳の再検討	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 市史研究紀要たからづか	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 上田直弥
2. 発表標題 兵庫の古墳埋葬施設からみた前・中期古墳における変化
3. 学会等名 兵庫考古談話会シンポジウム『前期古墳と中期古墳における器物や造墓集団の変化』
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上田直弥
2. 発表標題 埋葬施設からみた古墳時代前期・中期の首長墓系譜
3. 学会等名 古代学研究会2022年度拡大例会シンポジウム 首長墓系譜の再検討
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上田直弥
2. 発表標題 埋葬施設からみた古墳時代前半期の東北と近畿
3. 学会等名 シンポジウム「ヤマト政権と地域権力の相互関係 東北地方を中心に 」
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 上田 直弥	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 376
3. 書名 古墳時代の葬制秩序と政治権力	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関